



天竜川流域まかしよう宣言 ～水窪から知る、伝える、育てる～



2025年12月1日
ローカルコープ検討委員一同

1. 背景
2. 水窪のビジョン
3. 事業の全体像
4. 個別事業
5. 組織体制
6. (参考)今後の行程

「天竜川流域まかしょう宣言」の位置づけ

本宣言は、令和5年から7年にかけて実施された「自分ごと化会議」の参加者を中心に、浜松市および株式会社paramitaとの協働により策定されたものであり、これから水窪における取り組みの方向性を示すものです。

本宣言の策定過程では、計8回の自分ごと化会議を軸に、個人への聞き取り調査や、地域外企業へのインタビュー、20を超える地域団体へのヒアリングを実施しました。さらに、有志による他地域の視察や有識者を招いたフィールドワークなどを通じて、多様な知見や外部の視点も積極的に取り入れてきました。

「まかしょう」とは、「私たちに任せて」を意味する水窪の方言。水窪に住み、関わる私たち自身が、天竜川流域全体を自分ごと化して考え、行動していくことを宣言することで、地域内外のより多くの人たちの参加を呼びかける意味を込めています。

本書は、水窪という地域の現在地を見つめ直し、過去から未来への道筋未来への道筋をともに描くための羅針盤です。異なる立場や世代を超えて対話を重ね、学び合いながら、水窪のこれからを共にかたちづくっていくための共有の土台となることを目指しています。

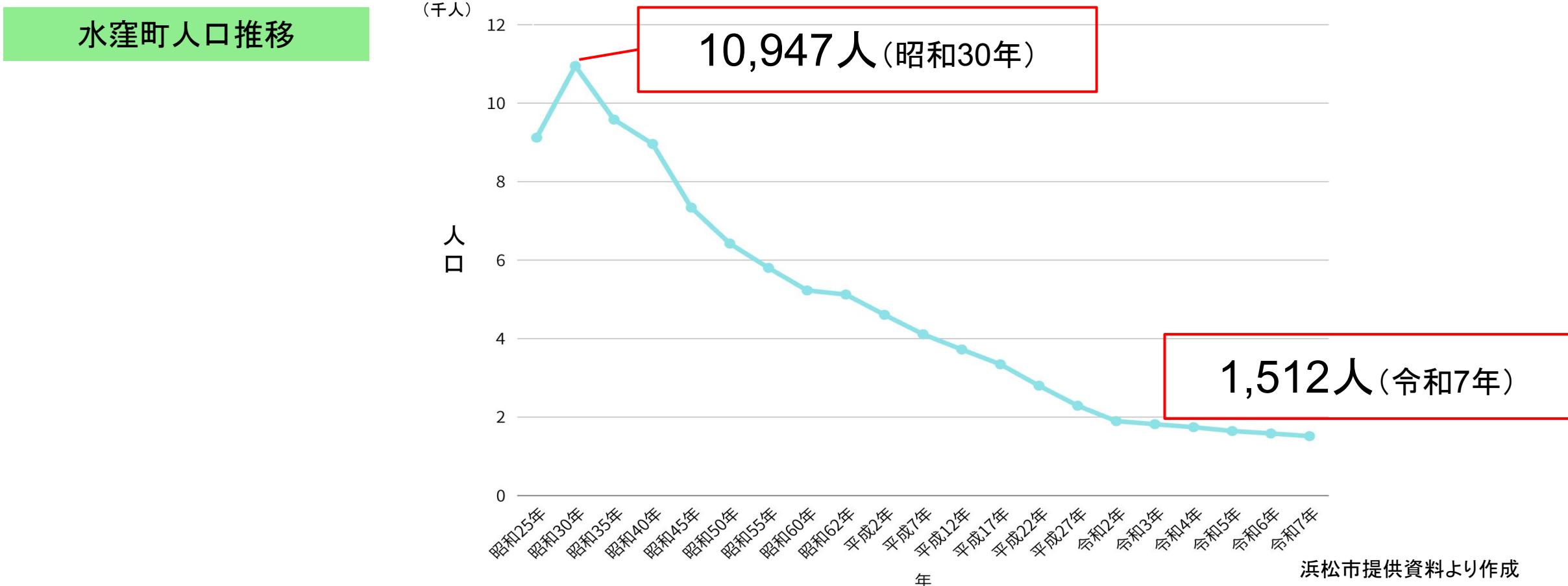
ローカルコープ検討委員一同(順不同)

高木 友吉	山口 延継	石本 勝久	守屋 千づる	向井 一美	守屋 正次郎	高木 俊二	坂口 京子
道下 武彦	榎 多賀夫	榎 洋子	平澤 文江	田中 真紀	片倉 真也	三石 卓	丸山 義仁
宇佐美 達也	宇佐美 聖子	久保敷 由加里	高坂 フランチエスコ太陽	前田 紘希	三輪 隼也	平澤 遼馬	田中 千陽
柳田 温	高木 圏乃	坂本 貞夫	井上 保典	守屋 銀治	中 政俊	小松 裕勤	原 邦司
高木 一徳	北井 利政	小栗 志介	山下 順子	湯前 良一	富士川 凜太郎	鈴木 光星	山下 梨音
耳塚 均	寺田 英忠	坂口 心菜	坂口 愛心	浜松市水窪支所	田中 佑典 (株式会社paramita)	瀧口 幸恵 (株式会社paramita)	尾中 健人 (一般社団法人構想日本)
原 大介 (コーディネーター)	大西 翔 (コーディネーター)	他14名					

1.背景

1-1. 計画策定の背景: 水窪の中長期的課題

- 水窪における現在の人口は1,512人(令和7年10月1日現在)。ピーク時の10,947人(昭和30年)から約85%減少している。
- 急激な人口減少により、地域内の商店や交通など、日常生活を支える基礎的なサービスの維持が困難になっているほか、地域行事や共同作業といったコミュニティ活動の担い手も年々減少。今後の地域の在り方そのものが大きな課題となっている。

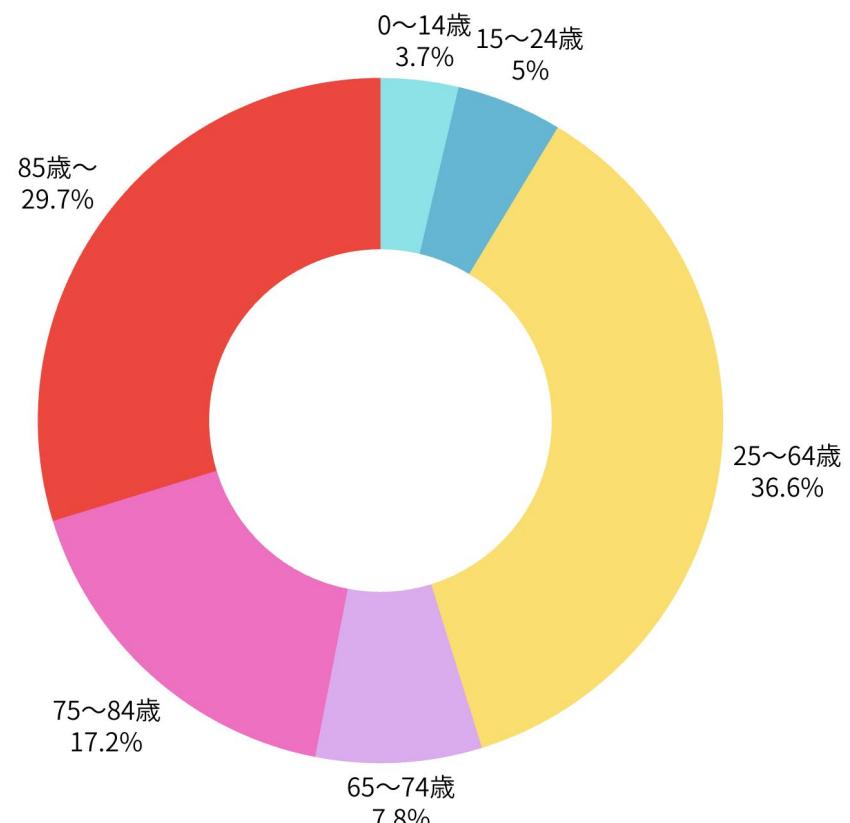


1-1. 計画策定の背景: 水窪の中長期的課題

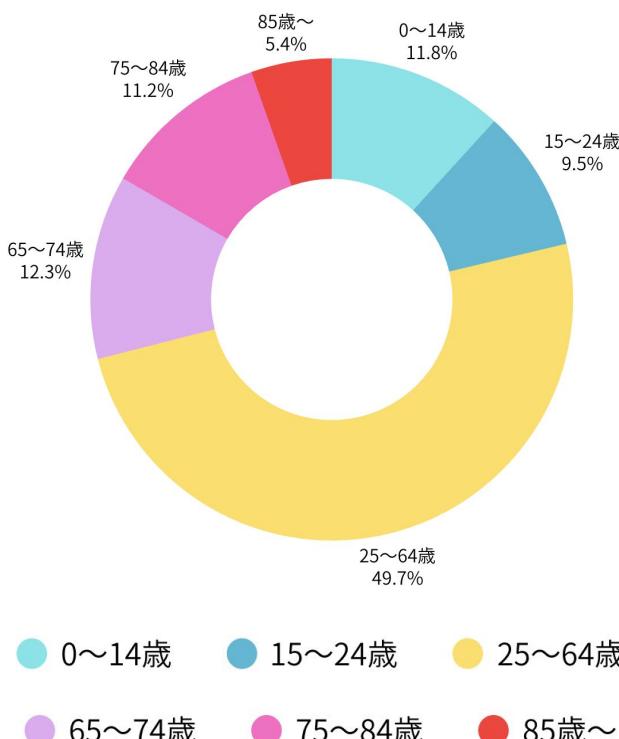
- 特に年少人口の減少は深刻であり、0～14歳の子どもが人口全体に占める割合はわずか3%。地域社会の将来を担う次世代の著しい減少を示しており、人口構成の極端な高齢化が進行している。
- 地域の教育機関にも大きな影響が及んでおり、小学校や中学校についても、生徒数の減少が続いている。今後の存続が危ぶまれている。令和11年には中・小合わせての生徒・児童が1桁になる見込みであり、地域コミュニティ全体の活力や持続可能性に対しても大きな不安をもたらしている。

水窪町年齢別人口構成比

浜松市提供資料より作成

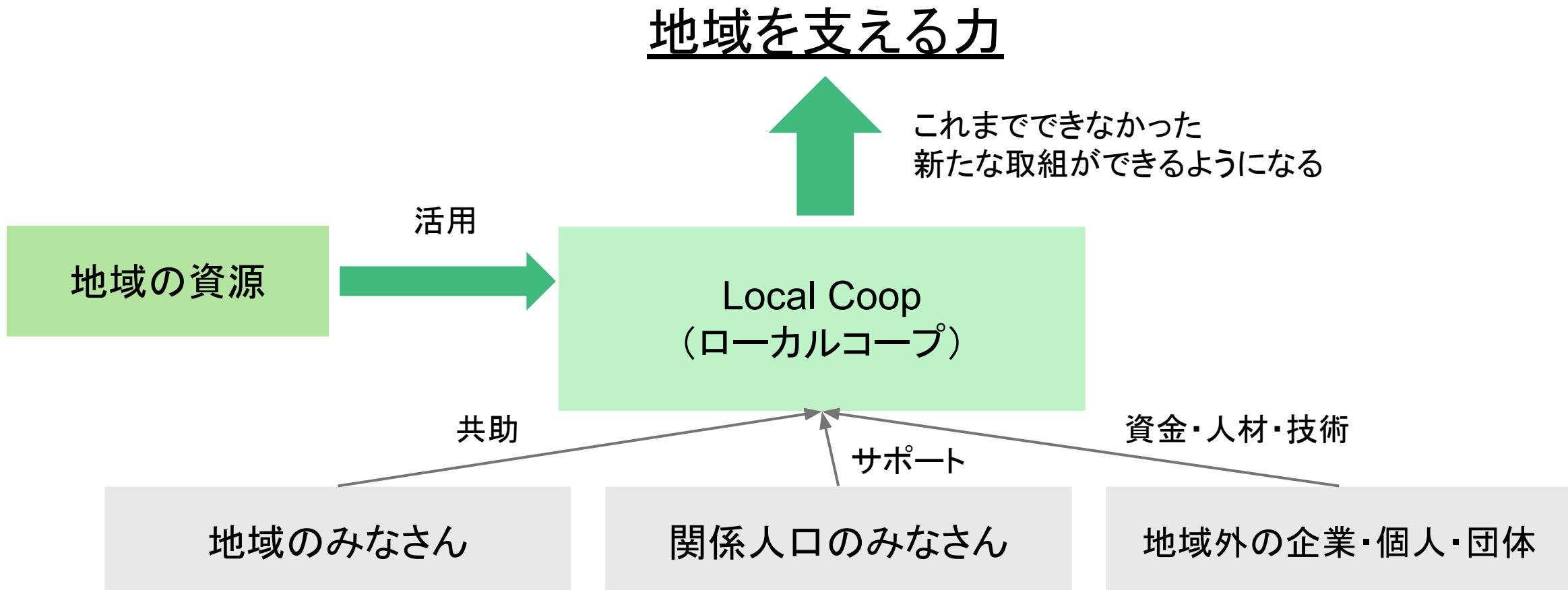


(参考)浜松市年齢別人口構成比



1-2.Local Coop(ローカルコープ)構想

- 令和3年5月、(一社)Next Commons Lab※が運営するサステナブル・イノベーション・ラボに浜松市が参加したことにより、水窪でのローカルコープ構想の可能性を調査開始。※(現)株式会社paramita
- ローカルコープとは、人口が減少する中でも、地域の資源を有効に活用しながら、地域住民の力と地域外の企業や個人、関係人口、団体の力を総動員することによって、地域を支える力を確保していく構想。ローカルコープを立ち上げることによって、住民だけでは実現が困難となっている新たな取組への挑戦を推進していく。



1-2.ここに至るまでの軌跡

- こうした問題意識から、令和5年度より、一般社団法人構想日本の協力の下、「自分ごと化会議」を開催。高校生以上80代まで、無作為抽出によって選ばれた住民と、水窪の将来や地域の課題、自分ごととして取り組んでいくことを議論してきた。これまで、令和5年度は4回、令和6年度、7年度はそれぞれ2回の計8回を開催し、延べ234人が参加した。
- 「自分ごと化会議」を通じて、地域の目指す方向性や今後の取組、住民自らどのように関わっていくかを議論し、見える化させてきた。



1-2.ここに至るまでの軌跡

「自己ごと化会議」1年目

- 「自己ごと化会議」1年目(令和5年度)においては、住民の意見として「提案書」をまとめた。
- 提案書では、地域を知ることや情報発信等が共通の関心として示されたほか、対話の場の継続を願う声も多数聞かれた。

提案の骨子

「水窪を知る・伝える・つくる」

たくさんの魅力がある水窪について、我々はもっと知りたいと考えています。それは「みさくば祭り」や「峠の国盗り綱引き合戦」といった、みんなが知っているような特別な催しだけではなく、四季折々の景色、地域住民が担ってきた役割、地域に根差した商売など、日常にあふれる何気ない良さも知っていきたい。そして、そのような元来ある魅力や良さ、役割を情報としてまとめ、これまで水窪に関わってきた人々やそうでない人々にもネットやテクノロジーも活かしながら、より多くの人に知ってもらう機会を作りたいと思っています。さらに、その一つ一つの活動を通じて地域コミュニティや人のつながりをつくり出し、より良い町づくりに活かしていきたい。そのように紡がれた水窪を、子どもたちやこれから移り住むひとたち、このまちと関わりを持ってくれる人たちにも受け継いで欲しく、行動を起こしていきます。

提案

1. 地域外への情報発信と地域内の情報共有を強化する

私たち住民が行うこと	地域が行うこと	行政が行うこと
①学ぶ ②発信する	①各団体（観光ガイド・山に生きる会等）が情報発信する ②共通して発信したいメッセージをつくる	①水窪の発信強化 ②浜松市としての発信 ③市民活動の支援

提案

2. 次世代に続くコミュニティをつくる

私たち住民が行うこと	地域が行うこと	行政が行うこと
①地域の外からの訪問を積極的に受け入れる ②積極的に関わる、巻き込む ③新しいやり方を試す	①若者や移住者にとっても居心地の良いルールづくり ②管理運営体制を見直す ③祭りやイベントの役割や意義を見直す	①共に挑戦する ②市民の活動を応援する ③自治会の役割を見直す、見直すきっかけを作る

提案

3. 水窪のよさをつなぐ、育てる

私たち住民が行うこと	地域が行うこと	行政が行うこと
①一人一人が暮らしの中に取り入れる ②文化を引き継ぐ努力 ③循環型の観光事業を起こす	①地域の奉仕活動に組み入れる ②文化を伝える企画を実施する ③観光 ④活動を続ける工夫をする	①注意喚起 ②施設管理方法の見直し ③現状を把握し、柔軟な対応

提案

4. 地域資源を活かした産業をつくる、商店を支える

私たち住民が行うこと	地域が行うこと	行政が行うこと
①商店を支える ②森林資源を生かす ③仕事をつくる	①商店を支える ②人手不足の解消、人材獲得 ③情報共有、発信 ④地域資源の活用	①情報集約発信、民間誘致 ②活動サポート ③森林管理

提案

5. 子どもたちや移住者が住み続けたいまち・水窪へ

私たち住民が行うこと	地域が行うこと	行政が行うこと
①子どもたちへ働きかける ②それぞれができるアクションをする	①子どもたちに伝える ②学校との関わり ③住みやすい環境づくり ④移住施設	①移住定住のサポート ②環境整備 ③事業づくりの検討

1-2.ここに至るまでの軌跡

「自分ごと化会議」2年目

- ・「自分ごと化会議」2年目からは、1年目の「自分ごと化会議」からの提案を実現していくための基盤として、ローカルコープの役割と事業内容を検討してきた。
- ・特に、今後必要なこととして「外部からの仲間と資金を集める」「対話と自治への参加の場をつくる」「地域資源が循環しまちの活動を支える仕組みをつくる」という3つの方向性が確認された。

自分ごと化会議での提案書内容

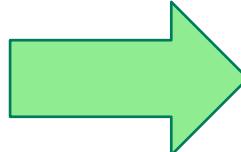
地域外の情報発信と
地域内への情報共有

次世代に続くコミュニティを作る

水窪のよさをつなぐ・育てる

地域資源を生かした産業を作る
商店を支える

子供たちや移住者が
住み続けたいまち・水窪へ



ローカルコープが推進すること(初期的)

外部からの仲間と資金を集める

対話と自治への参加の場をつくる

地域資源が循環し
まちの活動を支える仕組みをつくる

1-2.ここに至るまでの軌跡

「自己ごと化会議」3年目

- ・「自己ごと化会議」3年目では、水窪における取り組みの方向性として、水窪固有の「農・食」と「生物多様性」を組み合わせて、耕作放棄地を起点に水窪の自然資源の管理を行なながら、地域内外の人たちが関わり、文化を育むことはできないか、という議論になった。
- ・「農・食」「生物多様性」をスタート地点にしつつ、在来種や固有種、それらを生かした文化など、水窪において継承され続けている独自の価値を活かしながら、天竜川上流域に位置し、「水の窪(水久保)」である『水窪』という地理的特性を活かして、流域を活かした関係人口の創出に取り組んでいくことが議論された。



1-2.ここに至るまでの軌跡

水窪の未来を
自分ごとに
令和5年度

Local Coopで
できることを
検討
令和6年度

実装へ
令和7年度

やったこと

- 1年目『自分ごと化会議』全4回
 - 「無作為抽出」で集まった住民が本音で話す！
 - ローカルコープとは何か？
 - これからの水窪のあり方を考える

提案／成果

- 「水窪を知る・伝える・つくる」
※天竜区長へ提案書を手渡し

- 尾鷲みんなの森づくりを視察
- 2年目『自分ごと化会議』全2回
 - 1回目参加者+回覧による公募
 - ローカルコープのグランドデザイン
 - 解決すべき課題や組織の在り方

- 水窪とつながるきっかけを提供し、外部から水窪に関わる総量を増やしていく
 - 様々な関係者が集まる場づくりの方法(関係人口の創出)
 - 水窪の資源活用(水、植物、山林、小規模農業、伝統食文化等々)
 - Local Coopという組織の根幹の話

- 3年目『自分ごと化会議』全3回
 - 具体的な事業に関する進捗
 - 具体的な組織運営のあり方
 - 新メンバーの参画(外部)

- グランドデザイン発表・法人設立
 - 事業の提案とスケジュール
 - 組織の動き出し

2.水窪のビジョン

2-1.天竜川流域まかしょう宣言～水窪から知る、伝える、育てる～

北遠の果て、天竜川水系の上流域。急峻な山々に抱かれ、清らかな水が川へと注ぐ「水の窪」で、私たちは支え合い、自然とつながって生きてきました。そんな水窪は、林業の衰退や人口減少の深刻化等によって、かつてできていたことが難しくなりつつある、日本でも、そして世界でも課題の先端にある地域です。浜松市の一員となり、福祉・医療・消防などのインフラがなんとか維持できている一方で、地域の固有の課題を議論し、未来を考える場が少なくなってしまっていました。

だからこそ、私たちは挑戦します。「もうしょんないら」でも「おら知らんぞお」でもなく、行政ばかりに頼るのではなく、地域のことを一番よく知っている私たち自身が、地域の課題に取り組みます。第2の自治とも言える『Local Coop』という考え方賛同し、その仕組みを活用して、ここに暮らし続けられる地域をつくります。自然との関わり方を新たにすることで、連日報じられる気候変動時代を生き抜く、新しい価値を私たちの暮らしから生み出します。

もちろん、私たちだけでは解決できないことも増えていきます。だからこそ、「水窪が好き」「水窪は面白い」「水窪にまた来たい」という人や企業や団体を増やし、外からの力と資金も受け入れ、これから時代を生き抜く知恵を互いに学びあい、一緒に地域をつくりていきます。そのための鍵は、水窪の人の良さです。水窪に暮らす一人ひとりが、水窪のことをさらに知り、良さを伝え、「自分ごと」として動くことです。

私たちは、この地で暮らしてきた先人の記憶を忘れません。

在来種や固有種の野菜、それらを生かした伝統料理、古くから続く街道の面影、手を入れて守られてきた山々、古くからのお祭りや伝統行事——。それらは先人の営みの積み重ねであり、水窪の宝です。私たちは、それらをただ残すのではなく、時代に合った形に作り変えながら、『Local Coop』の活動を通じて未来へと手渡していきます。

2-2.水窪のビジョンに関する議論

経緯 趣旨

取り組み初年度の住民会議で「水窪を知る、伝える、育てる」という言葉が生まれた。住民の地域への想いと行動への意欲が詰まった宣言として、その想いを実現していく事業や組織作りを2年目以降検討してきた。中でも、4つの誓いは水窪住民が大切にしたい考え方であることから、中心に据えることとなった。

住民の 意見

- 今回の宣言は「ビジョン」であり、あくまで方向性を示すものなので、必ずしも内容が具体的である必要はない。
- ビジョンは強制されるものではない。ただし、自らがロールモデルとなって、人が定着するよう努力していく必要がある。
- ひとりひとりが「水窪にかかわる人材」として、行政職員としての立場でなく活動を共にしてくれるうれしいです。
- ゴール・期限がないのがいいのかなと思う。
- 人の優しさやつながりに触れてほしい。
- 「足元からやってみよう」を大事にしている立場からすると、「もうしょんないら」をなくそうというメッセージは非常に良い。
- 「先人の記憶を忘れない」というくだりは非常に良い。水窪をつないできた人たちが大事にしてきたものを、きちんと受け取っていることが伝わる。

自分たちに できること

- この構想についてわかっている人が、そうでない人や知りたい人に共有できたらいいと思います。
- まずはローカルコープは何か? 何をやっているか?を伝えていく。
- 幸せにこの水窪で生きるために何が必要かを考え、もの申す。
- 「皆は一人のために、一人はみんなのために」の精神でやっていく。

3.事業の全体像

3-1.事業全体の方向性

ゴール

水窪とつながるきっかけを提供し、外部から水窪に関わる
総量を増やしていく

方向性

1. 水窪の地域資源を活かした取り組みであること
2. 外部の企業や個人、団体を巻き込みやすい取り組みであること
3. 行き来する人(関係人口)の増加に寄与する取り組みであること
4. 取組の初期ハードルが低いものであること
5. 水窪の様々な方々と関わりがあること

3-1.事業全体の方向性

浜松市内での天竜川最上流域の水窪から

企業・個人・団体を巻き込みながら

天竜川流域の豊かな暮らしを新しい形で創っていく。

3-1.事業全体の方向性

人と自然の多様な関係を水窪で取り戻す。

先人の知恵を引き継ぎ、

先端研究や経済とも交わりながら

地域内外の人がともに学び合う

水窪での実践を、他地域へ波及させていく。

3-1.事業全体の方向性

まずはその手がかりとして、

水窪で受け継がれてきた「農・食」に焦点を当てる。

地域課題である耕作放棄地の活用や文化の継承をはじめ、

水窪の自然資源の管理を行いながら、

「生物多様性」「文化多様性」をキーワードに、

地域内外の人たちが関わり、文化を継承していく。

3-1.事業の全体像

水窪が体現する「学び合いの場」

滞在場所の整備

堆肥の地域循環

水資源との関わり合いの再生

小規模分散型農業

共同作業場



3-2.事業の全体像に関する議論

経緯 趣旨

水窪が次世代へ引き継ぐべき価値として、「豊かな自然」や「食と農にまつわる文化」、「分かち合う暮らしの文化」が住民会議でも度々語られてきた。また地域課題として、耕作放棄地の増加や文化活動も含めたの担い手不足があり、関係人口を巻き込み自然資源の回復や増大につながる取り組みが必要と考える。浜松市内での天竜川水系の最上流域地域であるという地域性を生かし、流域の豊かさを生み出す活動を地域内外を巻き込みながら起こすことで、地域資源と関係人口を育てることを目指す。

住民の 意見

- 「食」「農」「資源循環」を中心に据えた方向性はよい。
- 在来種や食文化の継承を事業に組み込むのは賛成。
- 既存のNPOや団体と連携しないと実現は難しい。
- デジタル投票などの仕組みを導入するとよい。
- 地域住民が求めているものと、外から来る人が求めるものをすり合わせたい。
- 協力してくれる人がいれば、自分も何かできる。
- みんな高齢なので少し勇気がいる。
- 水窪は宝の持ち腐れ。魚やワカサギ釣りなど観光にも活かせる。

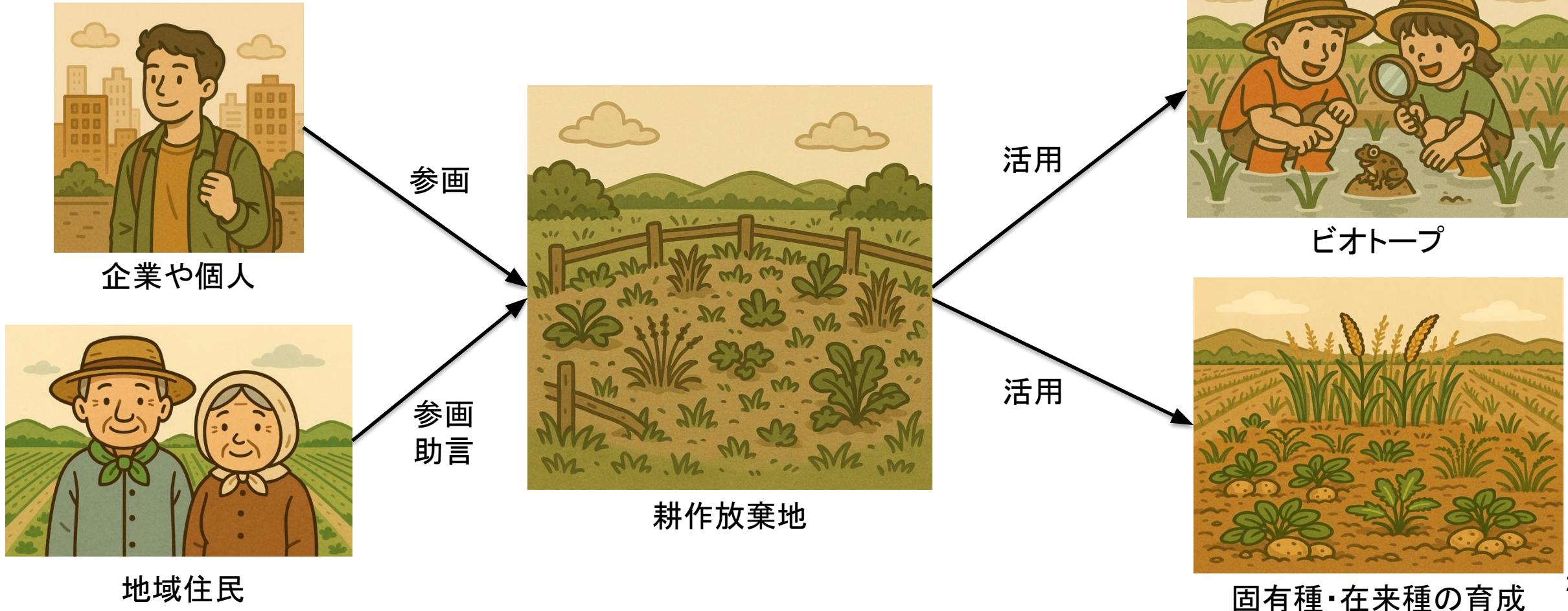
自分たちに できること

- 行事やイベントに参加し、体験を通じて地域を支える。
- 先輩の話を聞く機会をつくる。
- 森のツアーやリノベーション体験などを企画する。
- ボランティアで草刈りをする。
- 先輩の知恵を伝えるイベントを開く。
- 山を守る(景観維持、落石除去など)。
- 水窪を客観的に捉える機会を設ける。
- 体育祭を復活させ、熱気を次世代に伝える。
- 田楽の里を宿泊施設として提供し続ける。

4.個別事業

4-1-1.小規模分散型農業の推進

- ・水窪に点在する小規模な耕作放棄地を活用し、関係人口を巻き込みながら在来種の栽培などの農作業を進める。
- ・また、農産物の生産だけではなく、子どもが水遊びできるビオトープなど、自然や水、動植物と触れ合える場として整備することで、地域に開かれた豊かな景観と交流の場を創出する。



4-1-2.小規模分散型農業の推進に関する議論

経緯 趣旨

地域の魅力の一つに百姓としての暮らしの実態と日常でのあたたかい関わり合いがある。農地の規模が小さく、農業には向いていない土地ながら、小規模多品種で日常の食糧を生産し、交換し合う日常は、現代、とくに都会においては得難い魅力であり、その輪の中に関係人口となる人たちが入っていくことで担い手が増え、暮らしの風景の維持につながると考える。また、耕作放棄地の増加や鳥獣被害が深刻な状況にあり、食糧生産以外の活用や対策も必要となっている。

住民の 意見

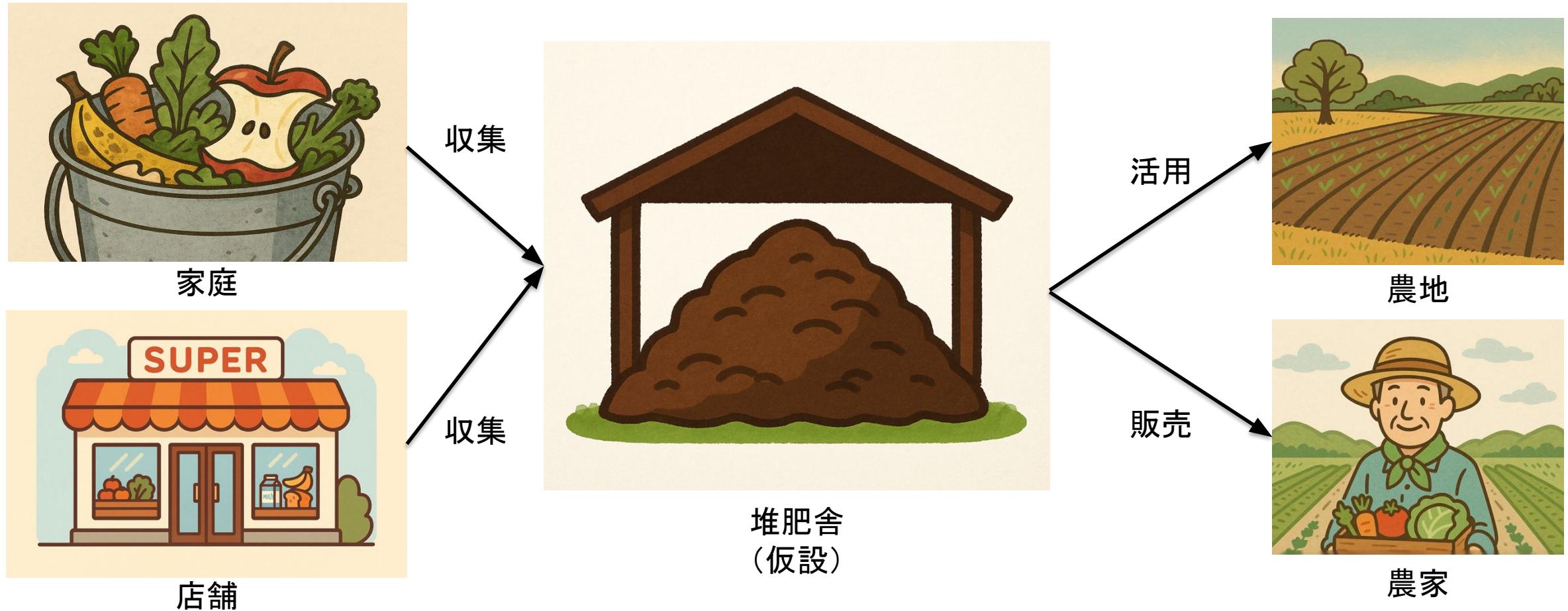
- 在来種に詳しい人が水窪にいるので連携することが重要。
- 獣害対策は柵設置が有効。自分の経験でも効果があった。
- モンキードッグ(犬を使った獣害対策)は昔は可能だったが、今は法律上厳しい。

自分たちに できること

- 自分で作った野菜を消費し、まわりにも食べてもらう。
- 在来種の野菜を作り続ける。
- 山菜を採って商品化する。
- 自家用野菜を商品化する。
- 農作業のボランティアに参加する。
- 獣害対策に協力する。
- 森林整備や柵設置を手伝う。
- 在来種の栽培や知識を次世代に引き継ぐ。
- 食文化を生かした加工品をつくる。
- 販売できるようにお店を整備する。
- 加工品をイベントで販売する。
- 農業をやりたい人を受け入れる体制を作る。

4-2-1.堆肥の地域循環

- ・水窪地区内に仮設の堆肥舎を設置し、生ごみや草刈りで出た葉類の堆肥化に関する実証実験を行う。実証実験の参加者は、生ごみ排出量の多い地域の飲食店やスーパーのほか、複数の家庭を有志で募集する。
- ・堆肥化した生ごみは、遊休農地を活用した小規模農業に活用する。余剰分が生産できた場合は、必要に応じて販売も行い、運営資金の獲得につなげる。



4-2-2.堆肥の地域循環に関する議論

経緯 趣旨

日本の堆肥はほぼすべてを海外輸入しており地域循環はおろか国内でも循環していない状況である。水窪ではかつて堆肥も地域内で循環する暮らしがあり、生ごみを捨てることにもったいないと感じる住民の意識がある。資源の地域循環を地域ぐるみで取り組める活動であり、市の生ごみの焼却処分コストの削減につながることから、官民連携で取り組む事業として実施を検討。

住民の 意見

- 水窪では多くの人が生ごみを燃えるごみとして出している。
- 生ごみを堆肥化して活用できる可能性がある。
- 燃えるごみにしてしまうのはもったいない。
- 高齢者の一人暮らしが多いため、全員から集めるのは大変。
- 堆肥化を進めるなら飲食店やスーパーから始めるのが現実的。
- 給食の残飯も対象にできるのではないか。
- 堆肥化をやりたいと思っていたが余力がなくできていなかった。

自分たちに できること

- 家庭で生ごみを分別する。
- 少量でも堆肥利用を試す。
- 飲食店やスーパー、学校給食の残渣を堆肥化する。
- 中心地の有志を募って先行的にモデルを作る。
- 地域のグループで分担して堆肥化に取り組む。

4-3-1.水資源との関わりあいの再生

- ・水窪を子どもや関係人口が水資源に接する機会を持つる場所にしていくために、治水、利水とのバランスを踏まえながら、例えば、草刈りや暗渠の見直し、ビオトープの形成、一部アスファルトから石積への転換などにより、人間と自然の関わり合いを再生できる環境を整える。
- ・また、川と深く関わっている森についても、将来的には山林整備や活用も見据えて事業を検討する。



荒れた小川



河川整備



耕作放棄地



ビオトープの形成



水や生き物とのふれあいの
場の形成

4-3-2.水資源との関わりあいの再生に関する議論

経緯 趣旨

住民会議では、荒れた山林や鳥獣被害に対する意見が多く寄せられた。水窪の山は急峻で一般市民が整備に参加するのは中々難しい環境である。暮らしと近い領域で、先人の知恵を生かし、人間も含めた生物多様性を捉え直すことを考えるとき、山からまちまでをつなぐ水資源との関わりを見直す取り組みから始めて、地域外の人たちも巻き込みながら、流域に対する意識醸成をし、山間エリアの保全につなげていく。一方、長期的な持続性を考える時、森林管理は欠かせない要素となり、また地域外の企業からの支援も得やすいため、ローカルコープで中長期的な事業として検討を進める。

住民の 意見

- 水窪の「水の窪」という名前のとおり、水との共生が大切。
- 自然の水の流れを壊さないことが重要。
- 毎年の草刈り予算が減っているため再計上してほしい。
- 守るべきものを洗い出し、方策を講じる必要がある。
- 自伐林業の良さを理解してもらう

自分たちに できること

- 日常で節水を意識する。
- 水辺の清掃活動をする。
- 水源を守るための奉仕活動を行う。
- 流域連携で川の管理をする。
- ウォーキングしながら雑草を抜く
- 山歩きをして森林に関心を持つ
- チェンソー技術などを先人から受け継ぎ、森林資源を守る

4-4-1.滞在場所・共同作業場づくり

- まちなかの空き家や空き地等を活用し、人々が集いともに作業を行ったり、農作業に必要な機具をレンタルできたりする交流拠点をつくる。また、農作業等に関わる関係人口が滞在できるよう、滞在拠点を整備する。



空き施設・空き家



共同作業場



滞在拠点

4-4-2.滞在場所・共同作業場づくりに関する議論

経緯 趣旨

水窪は中心地に住宅が密集しており、徒歩圏内で生活が可能な地域である。ただし、住宅の半数以上は空き家となっており、街道沿いの商店街も同様の状況である。また、一連の取り組みの機運醸成と環境整備として、農作業をやってみたい地域住民が気軽に意見交換ができたり、移住者や関係人口が自発的に地域活動に参加する入口となる交流拠点を整備することが有効であると考える。

また、関係人口を巻き込んでの農作業等を取り組みで検討しているが、作業前後に着替えやシャワー、道具の片付け等を行う場所がなく、休憩施設も十分でない状況である。活動を持続していくためには受け入れが負担にならず、関係人口も気軽に参加でき、また来たいと思ってもらえる滞在場所が必要だ。

住民の 意見

- 水窪市街地に作業場を設置するのが利便性が高い。
- 工場跡地や空き住居などを利用できる。
- 機材としては脱穀機、耕運機、ビーバー、コンプレッサー、色彩選別機などが考えられる。
- シェアキッチンについては中学校の給食設備を活用できる可能性がある。
- 暫定的には山村開発センターのキッチンを利用できる。

自分たちに できること

- 自分の空き家を提供・改修する。
- 機材や設備の利用に協力する。
- 共同で作業場を管理する。
- 食文化イベントでシェアキッチンを活用する。
- 団体で協力して農業用機材を整備・維持する。

4-5-1.自然と共生した持続可能な暮らしを体現する場所の創出

- 企業や関係人口を巻き込みながら、水窪における「学び合い」の象徴的な場所をつくる。圧倒的な自然環境の中、水窪で受け継がれてきた生活の知恵と新たな技術を組み合わせ、自然と共生した持続可能な暮らしを体感することができる小さな空間を整備する。

分類	技術(例)	価値
住まい	板倉工法、石場建て、草屋根、煙抜き付きの囲炉裏	湿気・地震など、風土への適応知
	高断熱設計、3Dプリント建築	快適性と省エネの両立
水利用	湧水・谷水の石枠利用、木製の水路・水船、雨水貯留桶	電力を使わない水利用の知恵
	雨水浄化、コンポストトイレ、グレイウォーター循環	独立した水循環システム
再生可能エネルギー	小水力、バイオマス、ソーラーパネル+蓄電池、風力タービン	地形や環境に応じたエネルギー自給
火・熱源	かまど、薪ストーブ、炭焼き・炭風呂、五右衛門風呂	山林資源の循環利用と文化継承
食料生産・保存	自動水耕栽培、ドローン農業、バイオ炭	高齢化にも対応した自給農
食料保存	天日干し・寒干し、発酵食(漬物、味噌、醤油)、雪室	エネルギーを使わない貯蔵技術
通信インフラ	Starlink、LPWAセンサーネットワーク	山間地でもネット環境やIoTが可能

4-5-2.自然と共生した持続可能な暮らしを体現する場所の創出に関する議論

経緯 趣旨

水窪の魅力の一つに周辺に点在する自然との距離が近い美しい集落がある。人口減少により、まちなかよりも早く限界を迎える現状にある。そこにある風景や紡がれた知恵を生かして、自然と共生した持続可能な暮らしへの実証プロジェクトや自然体験プロジェクトを実施することで、より多くの関係人口の巻き込みが可能となると考えられる。暮らしと離れた場所で、学び合いのテーマを設定することで、学者や企業等も巻き込み、外部からの主体的な参加を受け入れやすい状況をつくることが期待できる。まちなかの暮らしの循環がある事業と合わせて体験することで、学び合いの相乗効果を生む。

住民の 意見

- 水窪は宝の持ち腐れ。魚やワカサギ釣りなど観光にも活かせる。
- 獣害被害の把握と補助金対応を行政に求める。
- 山ぎわに遊歩道を整備する。
- 高齢化や担い手不足の中でも続けられる仕組みを作る。
- 先進事例の実証地ができるることはいいが、地域の人が置き去りにならないような事業にしてほしい。
- 何もしないでいると周辺の集落はなくなるだけ。やってみないとわからない。挑戦することが大事である。

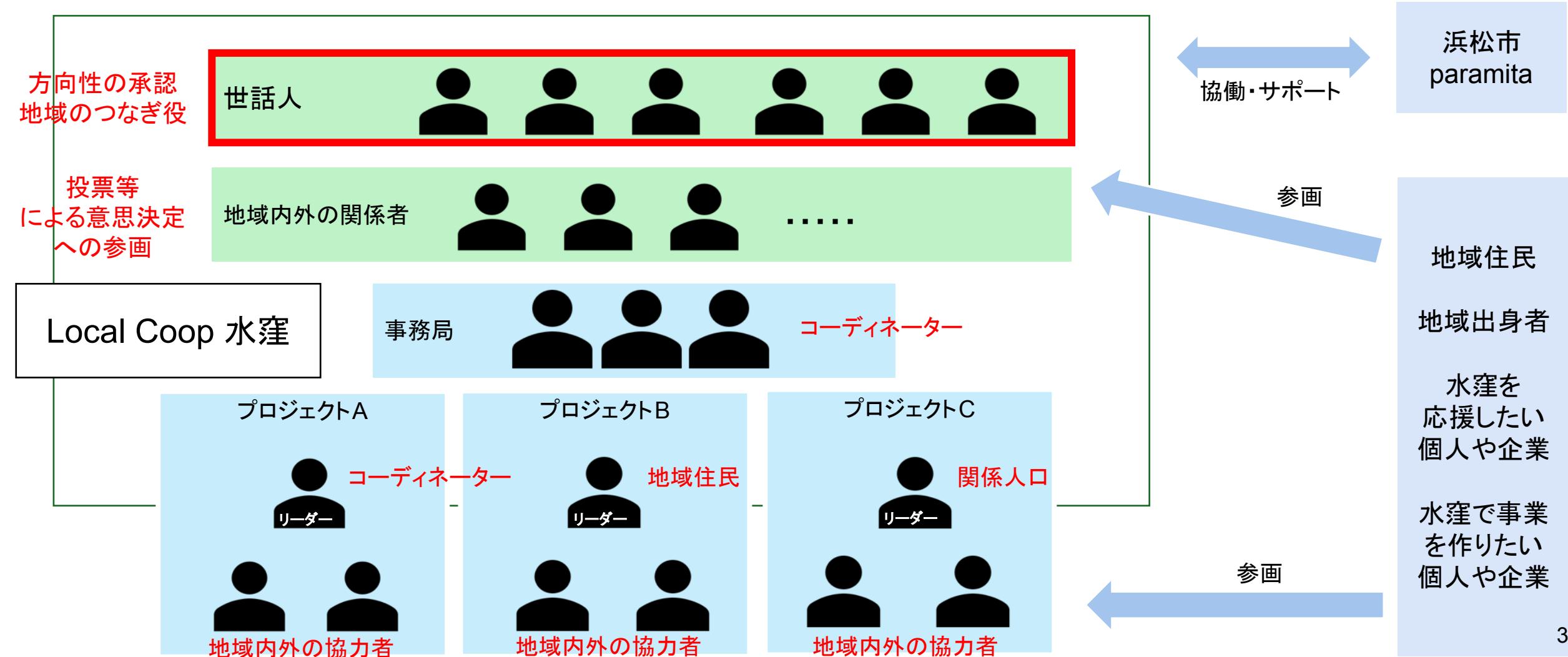
自分たちに できること

- 森のツアーやリノベーション体験など、学びに来る観光を提供する。
- 在来種の野菜を作り続ける。
- 野菜作りや木材の切り方など生活技術を次世代に伝える。
- 自家用野菜を商品化する、山菜を採って販売する。

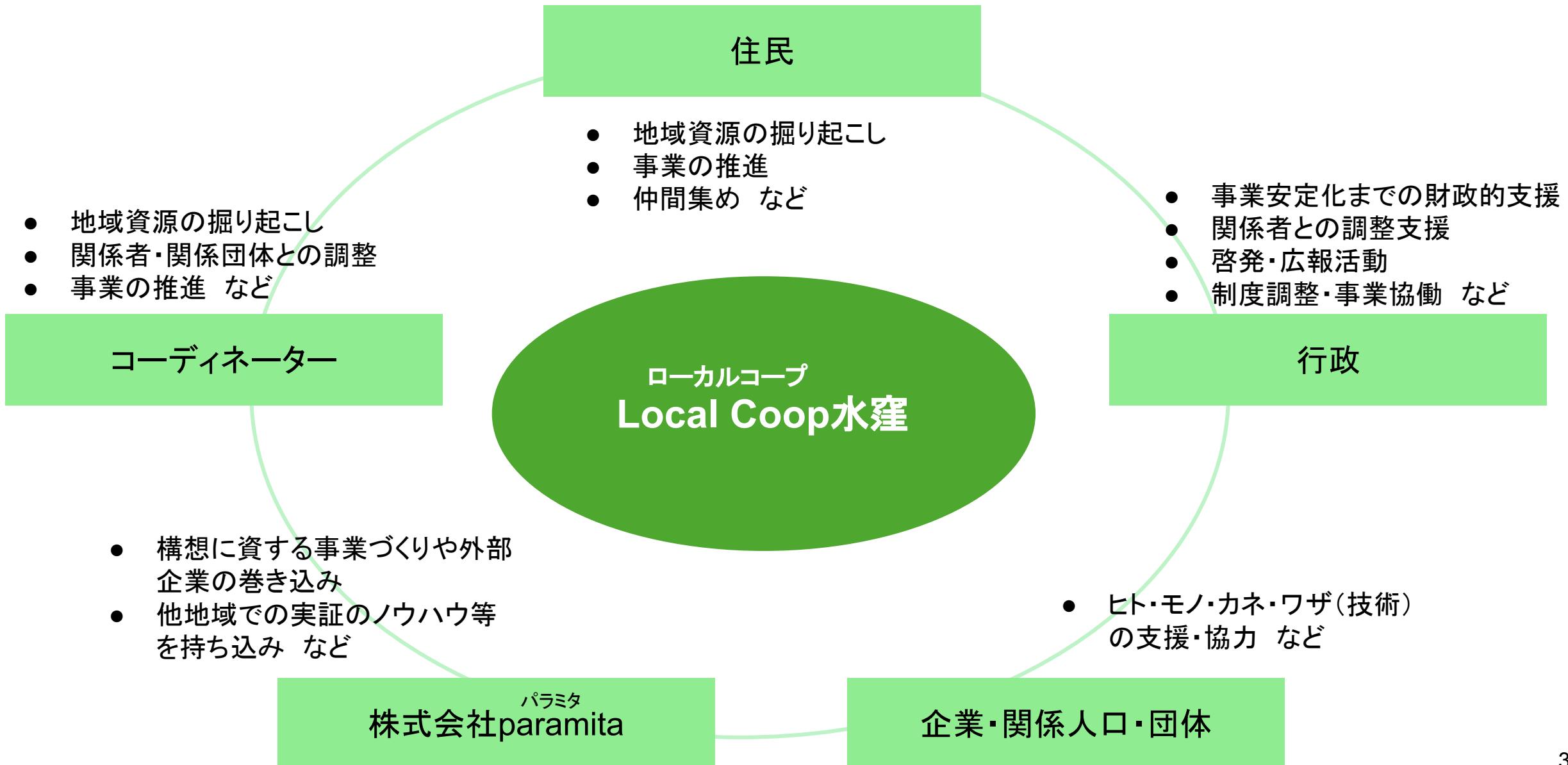
5.組織体制

5-1.ローカルコープ水窪の組織(組織イメージ)

- ・ 地域とのつなぎ役となる世話人、意思決定への参画権を持つ地域内外の関係者、事務局等から構成。プロジェクトは、地域内外の関係者を巻き込みながら推進していく。
- ・ 世話人は2—3年を任期とした交代制を想定。今後、様々な立場の方が担っていく仕組みを検討する。



5-1.Local Coop水窪の組織(役割分担)



5-2.Local Coop水窪(ローカルコープ)に関する議論

経緯 趣旨

- ローカルコープの事業構想を始めた2020年より、るべき地域自治組織の仕組みについて、多地域・多ジャンルの自治体や地域、企業、専門家などと議論を重ねており、そこで生まれた座組みを基本としながら、水窪での組織のあり方について協議を進めた。

住民の 意見

- 一部の人だけのローカルコープにならぬよう制度設計が必要。
- 全住民が参加できる仕組みが望ましい。
- 世話人や理事だけが決めるのではなく、透明な仕組みが必要。
- 組織の情報をオープンにし、誰でも把握や意見できるようにすべき。
- 「誰がやるのか？」が課題になる。
- ローカルコープの活動に多くの時間を割ける人は少ない。
- 給与が重要な要素になる。
- 外部の人に一方的に決められてしまう懸念がある。
- 世話人(理事・社員)の役割は重要だが人数は限られる。
- 世話人だけが決めるのは避けるべき。
- 投票権など住民が意思決定に関われる仕組みが必要。
- デジタル投票などを導入するのがよい。
- 既存団体がローカルコープの枠組みで取り組むのも一案。

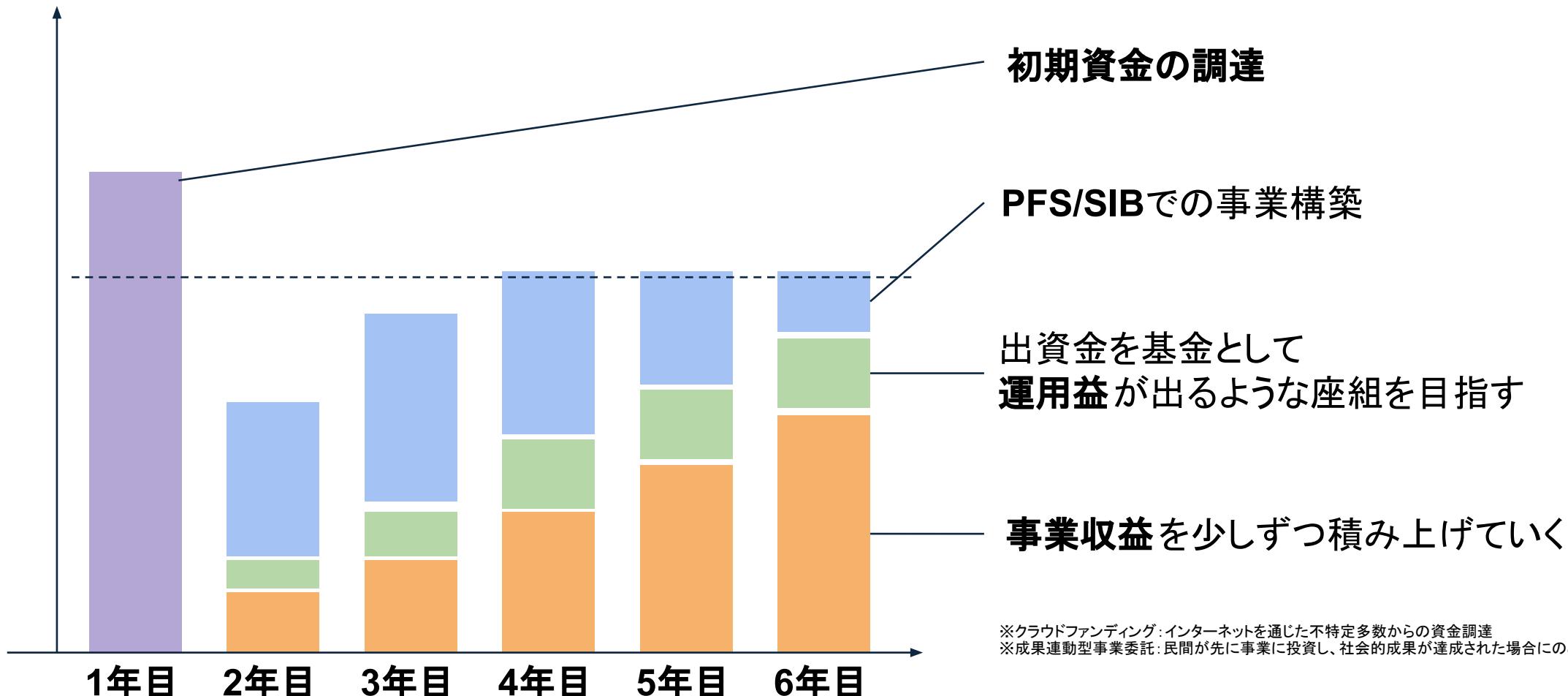
自分たちに できること

- 会議や投票に積極的に参加する。
- 自分の意見を率直に共有する。
- 小さなことでも役割を担う。
- 団体間で協力し、つながりを持たせる。
- 組織の透明性を担保する。
- 負担を分散し、無理なく活動を続ける。

6.(参考)今後の行程

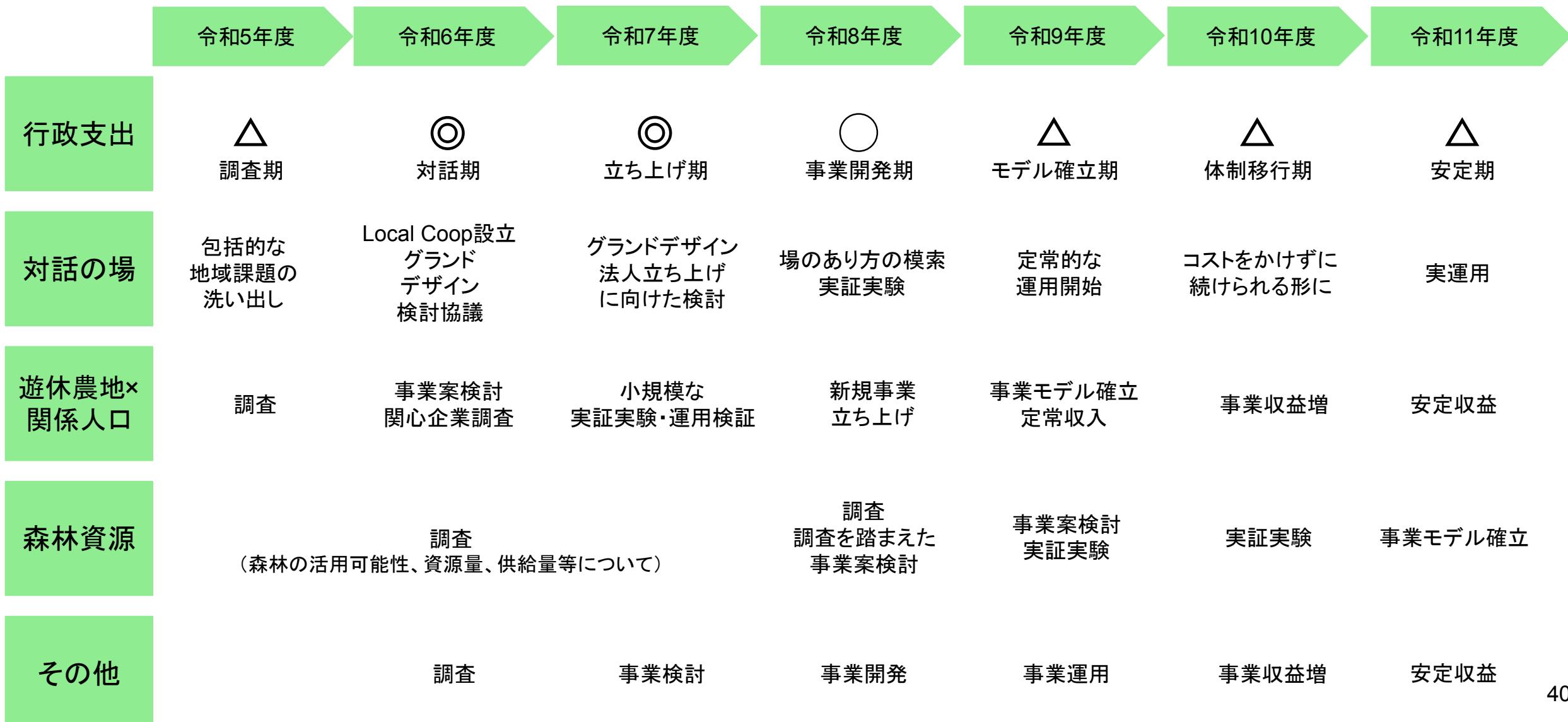
6-1.Local Coop水窪の収益構造

- 初期的には、クラウドファンディング※や企業からのふるさと納税や出資、行政からの補助金等を有効に活用し、事業基盤を確立。
- その後は、事業収益を積み上げつつ、基金組成による運用益やPFS／SIB(成果連動型事業委託※)を活用した委託事業を推進。複数の収入源を組み合わせ安定した収益構造を目指す。



6-2.事業の見通し

- 現時点のロードマップとして以下を想定。全てを同時に実現するのは困難であり、関係者との協働や意識合わせを重視しながら一歩一歩進めていくことが重要。



6-3.今後の行程(直近3か年)

	令和7年度	令和8年度	令和9年度
小規模分散型農業	<p>候補地選定 → 実証 → 関係人口巻き込み → 事業開始</p>		複数エリアに展開
堆肥の地域循環	小規模な実証	本格実証	堆肥場の建設 必要機材の導入 → 実装
水資源との関わりあいの 再生・自然と共生した持続 可能な暮らしを体現する 場の創出	研究・地域調査 住民対話・候補 地選定	初期実証開始	本格実証(試行)
滞在場所・共同作業場 づくり	民間企業や 物件所有者と 協議	工事・環境整備	稼働開始
その他	法人設立	森林調査／実証実験	その他事業案検討・開発

7. その他住民の意見

- 広報手段として水窪情報局(登録450人程度)が利用可能です。
- デジタルツールの使い方を学ぶ。
- 「水窪学」を学ぶ(歴史・自然・文化・民族など)。
- SNSで日常を発信する。
- 移住者の立場で情報発信を続ける。
- 観光客に水窪の魅力を伝える。
- 友人や電話で水窪のことを伝える。
- 自分は外への発信が得意なので外に力を入れる。
- 学校教育の中に情報発信を位置づける。
- 観光ガイドや「山に生きる会」など各団体が発信。
- 小グループでコツコツPRする。
- 組織として情報発信する体制を作る。
- 地域一体でアウトプットの体制を整える。
- 地域おこし協力隊と団体が組んでスマホ発信する仕組みを作る。
- 空き家を利用してラジオ局を作る。
- 複数NPOをまとめて「NPOみさくぼ」として発信力を高める。

- 個人やサークル単位の発信活動。
- 発信方法:SNS、ポスター、冊子、観光マップ、ラジオ、CM、BSなど。
- 共通の発信メッセージを作る。
- 「水窪を大切にする人に移住してもらう」というコンセプトを打ち出す。
- 水窪に誇りを持つことを伝える。
- 情報をまとめ核になる機関が必要。
- 個々の活動が点在して線にならないので、まとめる仕組みが欲しい。
- 愚痴ではなく事実や考えを外に発信することが大事。
- 高齢者でもスマホを使えるので、外との交流に活かすべき。
- 水窪の存在そのものが消えていく不安がある。
- 個人でも行政でもよいので、水窪の情報が集約されるサイトやLINEが欲しい。
- SNS発信は持続性が大事。無理なく続けられる体制を作る。
- 「水窪学」を設置して歴史や文化を学び、誇りを持てるようにしたい。